

平成艸紙



おりおりの記

美しくて難しい日本語

公益財団法人 資本市場研究会
理事長

篠沢 恭助

「今さら、日本語の乱れを嘆いても、しかたあるまいと思う。しかし、だれかがそれを指摘し続けないと、やがては正しい用法が忘れ去られるのではないか、という不安を覚える。」これは著名な作家、逢坂剛氏のある随想（昨年10月23日読売夕刊所載）の書き出しである。私も全く同感である。しかし、いろいろなケースについて個別に検討してみると、言葉の使い方というのは○か×か、一刀両断とはいかない難しい問題を孕んでいることが分ってくる。

逢坂氏も書いておられたが、最も良く指摘されるのは「られる」だろう。「られる」は、「可能」と「尊敬」の二つの機能の何れであるのかを瞬時に判断しながら使う美しい言葉だ。だからプロの大投手が「(試合に)出れます」「投げれます。」と言っているのを聞くと興ざめだ。ところが権威筋にうかがってみると、アンケート調査では、特に、「可能」を表現する「られる」については、すでに世の中は「・・られる」派と「・・れる」派がおおよそ半々の割合にまで来てしまっているとのこと。頹勢挽回どころではなさそうだ。難しい話だ。(なお、「られる」は「受身」の機能もある。例：「取られる」)

私が、前から気にしているのは「重し」という言葉である。経済記事や見出しで時々お目にかかる。「(株価が) ○円安、円高が重し」、「欧州経済

不安が輸出に重し」等。私の所見は「重し」は「重石」だ。重石は重きをなすということだから、「○氏の入閣、新内閣に重し」ならドンピシャリだが、株価や輸出の足を引っぱったと言いたいのなら「重荷」の方が適当ではないのか。「米 ガソリン高、経済に重荷」などの見出しとか、「メルケル首相が若者の失業が欧州経済の重荷だと語った」という記事を見て心が安まる。しかし、「重し」には「ものをおさえるのに用いるもの(漬物の重し)」との意味もあるのだから「円高が重し」は誤用とまでは言えないと忠告してくれる人もいる。私はう〜んと唸る。難しい。

礼儀正しい高校球児や超一流のスポーツマンがインタビューに応じて発する「感動を与える」という言葉の使い方も気に入らない。感動はこちらが「する」もので、選手たちから「与え」られるものではないだろう。書評で「この本はきっと読者に感動を与えることだろう」などというのとはわけが違う。先輩、友人、そして応援してくれる全国の人びとに対して発信する言葉としては不適當な「上から目線」のせりふと映る。「感動」という単語を用いるなら「感動してもらるように頑張ります。」と言うべきではなからうか。先生やスポーツ指導者の皆さんには、純心なスポーツ青年がそれと気付かずにいる言葉のTPOをも教えて上げて欲しいものだ。